

各地の音楽活動

●北海道

八木 幸三

札幌交響楽団の首席指揮者となったE・グランディが就任記念として、大曲であるマーラー／交響曲第2番「復活」を渾身のタクトでドライブ(4月定期)。グランディは「復活」というより「危機を乗り越える」ことがテーマとプレトークで語り、まさに混沌とする今の世界情勢の中で、前途に希望を感じさせる一夜となった。グランディは4月新・定期hitaruシリーズで、ベートーヴェン／交響曲第7番を両翼配置による立体感のある精緻なアンサンブルと清新なフレーズ感で聴かせた。さらに彼は、6月定期でR・シュトラウス／交響詩「ドン・キホーテ」とラヴェル／ダフニスとクロエにより、色彩豊かな管弦楽の醍醐味を味わわせてくれた。正指揮者、川瀬賢太郎は、3月新・定期で宮田大を独奏に迎えての菅野祐悟／チェロ協奏曲「十六夜」を宮田の情感たっぷりに歌い上げるチェロと管弦楽の静謐で幻想的な背景で月夜の神秘性を醸し出した。「祈り」をテーマにした11月定期では2曲の邦人作品と大編成のストラヴィンスキー／春の祭典を端正にまとめ上げていた。友情指揮者広上淳一は、武満徹／「乱」組曲と外山啓介の打楽器のようなピアノを伴った伊福部昭／リトミカ・オスティナタで重厚感のある響きを放ち(1月定期)、12月新・定期では米元響子を独奏者に迎え、尾高惇忠／ヴァイオリン協奏曲を静謐な第1楽章から扇情的なフレーズを描く第3楽章までを豪快に奏でた。前首席指揮者M・バーメルトは2月定期でモーツァルト／グラン・パルティータを13名の団員により典雅に奏で、ブラームス／交響曲第3番も彼らしく弱奏部での緻密な音の積み重ねを基盤としながら雄大な楽想を表出させた。首席客演指揮者の下野竜也は、名匠A・ケフェレックと共にベートーヴェン／ピアノ協奏曲第4番に内在するロマン性を正攻法で表出させ、ケフェレックの優しく優雅な音色から彼女の世界観に惹きつけられた。他の客演指揮者では、86歳にして益々旺盛な音楽活動を展開するH・ホリガーが、ケルターボーン／オーボエと弦楽のための変奏曲を吹き振りし、オーボエのレジェンドらしい音色が強烈な印象を与えた。ウィーン・フィルのコンサートマスターF・シュトイデも弾き振りでモーツァルト／ヴァイオリン協奏曲第5番を巧みなボウイングで紡いだ。

パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌(PMF)は、世界23カ国・地域1345人の応募者から選ばれた95人のアカデミー生によるPMFオーケストラが、オープニング・ナイトで、この国際教育音楽祭の提唱者バーンスタインの「キャン

ディード」序曲を華やかに演奏。13年前にコンダクティング・アカデミー生としてPMFに参加したK・カネラキスが快活なタクトでオケを牽引した。同オケはカネラキスの指揮で、五明佳廉を独奏者に迎えてのシベリウス／ヴァイオリン協奏曲とウィーン・フィルとベルリン・フィル教授陣を含めた大編成オケによるマーラー／交響曲第1番「巨人」を壮麗に奏でた。五明佳廉は小菅優とデュオリサイタルも開催。モーツァルト／ヴァイオリン・ソナタ第35番では小菅の粒立ちの良いピアノを背景に、五明の艶のある音色が伸びやかにアダージョ楽章を歌い上げていた。35回目のPMFを記念し、国内外で活躍するPMF修了生が集まった室内管弦楽団による演奏会を開催。コンサートマスターに何度かPMFに登場している郷古廉、指揮もPMF修了生のD・ルンツが担い、ペンデレツキ作品やルトスワフスキ／クラリネットとアンサンブルのための舞踏前奏曲などが演奏された。ルンツはホストシティ・オーケストラである札幌と共演。ショスタコーヴィチ／交響曲第10番では、PMFアメリカ教授陣とアカデミー生も加わった大編成オケの醍醐味が楽しめた。教授陣による3つの室内楽コンサートでは、R・キュッヒルらウィーン・フィルの現役・OB団員によるシューベルト／弦楽四重奏曲第15番やA・ブラウらベルリン・フィル団員によるダンツィ／木管五重奏曲、さらにアメリカ主要管弦楽団員によるR・シュトラウス／交響詩「ティル・オイレンシュピーゲル」の管弦5重奏版などが聴けた。PMFの総決算とも言えるGALAコンサートは、巨匠M・ヤノフスキを首席指揮者に迎え、ドイツ音楽の神髄をPMFオーケストラから引き出した。R・シュトラウス／交響詩「死と変容」では、PMF教授陣も加わる大編成オケによって、人間の魂が苦悩を越えて浄化されるという崇高なテーマが堂々と謳い上げられていた。

道内オペラ界では、札幌文化芸術劇場hitaruオペラプロジェクトの第2弾として道内出身キャストを中心に『ドン・ジョバンニ』全2幕を上演した。タイトルロールの栗原峻希をはじめ地元勢として、針生美智子(アンナ)と倉岡陽都美(エルヴィーラ)が対照的な声質で熱演。岡元敦司(レポレッコ)は、抜群の演技力で物語を力強く牽引した。栗國淳の演出は、奇をてらわぬ正攻法で音楽をじっくりと聴かせ、指揮の園田隆一郎は、自らフォルテピアノを奏で、レチタティーヴォなど自然の流れで出演者の演技を際立たせていた。北海道二期会は「女はみんなこうしたもの」

vol.2と題し、岩田達宗の演出で名作オペラを通し、様々な愛のかたちを公演。4タイトルのオペラの中で4重唱が3曲歌われるなど、客席を含めホール全体を使って生の歌声が飛び交う立体感が楽しめた。北海道実験劇場は、『土方歳三～炎の生涯～』と題し、土方の波乱に満ちた半生を原作・広瀬るみ、作曲・二橋潤一、台本・塚田康弘という道内在住者がオペラ化。全3幕、約3時間に及ぶ道産創作オペラとして発信した。

声楽ではオペラや宗教曲など幅広く活躍する北海道鷹栖町出身の中江早希が日本歌曲とドイツ歌曲によるリサイタルをおこない、LCアルモーニカ代表の南出薫が、15年ぶりのリサイタルで『修道女アンジェリカ』から“母もなく”を我が子への深い愛と悲しみを込めて切々と歌い上げた。北欧歌曲の第一人者として、またオペラでも豊富な経験を持つ道教育大教授大久保光哉が、邦人作曲家作品によるリサイタルを開催。さらに札幌大谷大学教授三山博司がブリテン作品などで清澄なテノールを聴かせた。

ピアノでは道教育大准教授二宮英美歌が、フランス現代作品や彼女の夫である作曲家二宮毅の「秋之三夜」を世界初演。音を極限にまで削ぎ落とし、洗練された音の連なりが「竹取物語」のかぐや姫昇天を静謐な空気感で描いていた。大宮理がバッハ／ゴルトベルク変奏曲を自身が所有する堀米蔵製作のチェンバロで全曲演奏し、古稀を越えた奏者とは思えない若々しさで、抜群の響きと豊かな音色を聴かせた。

室内楽では道教育大教授で、山田和樹率いる横浜シンフォニエッタのコンサートマスターも務める長岡聡季が、藝大フィルハーモニア管弦楽団首席ビオラ奏者吉田篤を伴ってモーツァルト／二重奏曲などを快演。札幌コンサートホールと札幌音楽家協会の共催による「札幌の音彩(ねいる)Ⅱ」が、札幌出身の指揮者横山奏を迎えて、同協会女声合唱団と室内管弦楽団により市内在住の作曲家南聡の合唱作品やモーツァルトの交響曲を流麗に演奏。山本泰子、溝田令の二人のヴァイオリニストを中心に編成された弦楽合奏では、ヴィヴァルディとバッハの「2つのヴァイオリンのための協奏曲」が演奏され、二人の対照的な音色で軽妙なカノン風の掛け合いなどが楽しめた。札幌出身の作曲家でピアニストの石垣絢子は、書道とのコラボによるユニークな企画で、札幌のヴァイオリニスト佐藤郁子を伴って自作自演の作品展をおこなった。ウクライナ出身のチェリスト、トラブロワが、札幌コンサートマスターの田島高宏と妻でピアニストの田島ゆみと共に、ウクライナ人作曲家の室内楽作品で平和への思いを音楽で伝えた。

八木幸三（やぎ・こうぞう）

北海道教育大学特設音楽課程卒業。管弦楽・合唱・室内楽・吹奏楽・ミュージカル作品などを多数作曲。札幌市新人音楽会作曲部門、英国エディンバラ音楽祭、ブタベスト現代音楽祭などで作品発表。歌劇『ノンノ』、館野泉監修左手のためのピアノ作品など作曲。北海道新聞、音楽専門誌「音楽現代」で音楽会評執筆。北の聲アート奨励賞、札幌文化奨励賞、札幌芸術賞などを受賞。北海道作曲家協会会長を歴任。現在札幌音楽家協議会会長。